



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネル展示 : Introduction to STAND UP TAKE ACTION in Hokudai
Relation	STAND UP TAKE ACTION in Hokudai. 2012年10月17日(水). 北海道大学附属図書館 本館 メディアコート, 札幌市.
Issue Date	2012-09-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50172
Type	lecture
File Information	anell.pdf



Introduction to

STAND UP



TAKE ACTION

世界の貧困解決のために
みんなで立ち上がろう！

in Hokudai

AGAINST POVERTY AND FOR THE MILLENNIUM DEVELOPMENT GOALS

10/17 WED 18:30.

北海道大学附属図書館 本館 メディアコート

■はじめに

北海道大学附属図書館では、10/17(水)18:30 より「**STAND UP TAKE ACTION in Hokudai**」を開催します。これは、世界の貧困解決と国連の「ミレニアム開発目標」達成を訴えて、文字どおり「立ち上がる」イベントです。さらに、単に立ち上がるだけでなく、具体的な行動へと踏み出すために、工学研究院・佐野大輔准教授によるミニ講演と、北大生による国際協力活動の事例報告も行います。

イベントに先立ち、パネル展示を企画しました。当展示を通して、イベントの趣旨にご賛同いただけましたら、ぜひ友達、同僚をお誘いのうえ、10/17(水)18:30 開演の「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」にご参加ください！

■展示の構成

1. 立ち上がる！ その前に

- ・「STAND UP TAKE ACTION」って何だろう？
 - ・どうして図書館で開催するのだろうか？
 - ・「ミレニアム開発目標」って何だろう？
 - ・その目標はどこまで達成しているのだろうか？
- といった疑問にお答えします。

2. 北大の先生へのインタビュー

世界の貧困や開発について、北大の5名の先生にお話を伺いました。おすすめの本やメッセージもご紹介します。先生たちの研究や経験から、貧困について考える手掛かりが見つかるはずです。

それでは、展示をご覧ください≫

「STAND UP TAKE ACTION(=スタンド・アップ)」とは？

「スタンド・アップ」は、世界の貧困解決と「ミレニアム開発目標」(のちほどご説明します)達成のために、2006年から始まった世界的なキャンペーンです。貧困を終わらせたいという意志を示すために、文字どおり「立ち上がる」(立ち上がることが困難な方は別のかたちで意志を示す)イベントです。2009年には世界各地で**1億7000万人**が参加しました。日本では、NGOネットワーク「動く→動かす」主催、国連広報センター共催のもと、外務省やJICA等が後援しています。

■目的

「スタンド・アップ」は以下の3点を目的としています。

伝える	ミレニアム開発目標(MDGs)と貧困の原因を広く知ってもらう
声を届ける	世界のリーダーにMDGs達成のための取り組みを強化してほしいというアピールを行う
輪を広げる	スタンド・アップを通じて、貧困問題解決に取り組む人々の輪を広げる

■成果

2011年は、日本全国で10月1日～17日の期間中、**3万1389人**(北海道では1,068人)が立ち上がりました。この成果を携えて、主催者と参加者の代表(岩手県の高校生)が**藤田幸久財務副大臣と会合**を行い、世界の貧困解決のために、日本政府のさらなる貢献を訴えました。

※「スタンド・アップ」について詳しくは、<http://www.standup2015.jp> をご覧ください。QRコードはこちら▶



■参加するには？

参加方法はいたって簡単です。

イベント期間中に、**2名以上**で集まって、

1. 宣誓文を読む
2. 立ち上がる(STAND UP)
3. 人数を数えて写真を撮る
——そして、
4. 主催者に報告する
5. 貧困解決に向けて行動する(TAKE ACTION)

というものです。

附属図書館では、**より簡単**で(上記の3と4を図書館が担当)、**より深く考えられる**(ミニ講演+活動報告)イベントになるよう、「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を企画しました。

どうして図書館で開催するのだろう？

北海道大学附属図書館/国連寄託図書館のご案内

■「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」企画趣旨

北海道大学附属図書館は、国連の寄託図書館に指定されており、国連資料の所蔵および提供、国連の広報活動への協力を行っています。当館は日本で3番目に古く(1963年指定)、道内唯一の国連寄託図書館です。

このたびは、

- ・国連の取り組み、特に「ミレニアム開発目標」を知っていただくこと
- ・当館が国連寄託図書館であることを知っていただき、所蔵している国連資料を活用していただくこと
- ・そして、何より、世界の貧困解決のために何か行動を始めていただくこと

を目的に、「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を企画しました。

■北海道大学附属図書館/国連寄託図書館でできること

国連資料の閲覧・複写

国連資料は主に、中央棟4階の「国際資料コーナー」にあります。北大の学生、教職員および図書館利用証をお持ちの方は10冊まで借りることができます。



国連に関する調査のご相談

国連に関する調査のご相談をお受けしています(平日9～17時)。当館だけでは解決困難な場合は、全国の寄託図書館や国連関係機関とのネットワークを活かして解決に努めます。お気軽に職員にお訪ねください。



ニュースのチェック・広報資料の持ち帰り

正面玄関ホールでは、国連広報センター提供のニュース(毎日の動き、プレスリリース)を掲示するとともに、国連の広報資料を配布しています。



ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals) とは？

2000年9月、国連ミレニアム・サミットにて、21世紀の国際社会の目標として、より安全で豊かな世界づくりへの協力を約束する「**国連ミレニアム宣言**」が採択されました。この宣言と1990年代に開催された主要な国際会議やサミットでの開発目標をまとめたものが「**ミレニアム開発目標 (MDGs)**」です。MDGsは国際社会の支援を必要とする課題に対して**2015年までに**達成するという期限付きの**8つの目標**、**21のターゲット**、**60の指標**を掲げています。それでは、どんな目標で、何をターゲットとしているかを見てみましょう。

 <p>極度の貧困と飢餓の撲滅 Eradicate extreme poverty and hunger</p> <p>ターゲット 1-A 2015年までに1日1ドル未満で生活する人口の割合を1990年の水準の半数に減少させる</p> <p>ターゲット 1-B 女性、若者を含むすべての人々の、完全かつ生産的な雇用、ディーセント・ワーク(適切な雇用)を達成する</p> <p>ターゲット 1-C 2015年までに飢餓に苦しむ人口の割合を1990年の水準の半数に減少させる</p>	 <p>HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延防止 Combat HIV/AIDS, malaria and other diseases</p> <p>ターゲット 6-A 2015年までにHIV/エイズのまん延を阻止し、その後、減少させる</p> <p>ターゲット 6-B 2010年までに必要とするすべての人がHIV/エイズの治療を受けられるようにする</p> <p>ターゲット 6-C 2015年までにマラリアやその他の主要な疾病の発生を阻止し、その後、発生率を下げる</p>
 <p>普遍的な初等教育の達成 Achieve universal primary education</p> <p>ターゲット 2-A 2015年までにすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする</p>	 <p>環境の持続可能性を確保 Ensure environmental sustainability</p> <p>ターゲット 7-A 持続可能な開発の原則を国家政策やプログラムに反映させ、環境資源の損失を阻止し、回復を図る</p> <p>ターゲット 7-B 2010年までに生物多様性の損失を確実に減少させ、その後も継続的に減少させる</p> <p>ターゲット 7-C 2015年までに、安全な飲料水と衛生施設を継続的に利用できない人々の割合を半減させる</p> <p>ターゲット 7-D 2020年までに少なくとも1億人のスラム居住者の生活を大きく改善する</p>
 <p>ジェンダー平等の推進と女性の地位向上 Promote gender equality and empower women</p> <p>ターゲット 3-A 2005年までに可能な限り、初等・中等教育で男女格差を解消し、2015年までにすべての教育レベルで男女格差を解消する</p>	 <p>開発のためのグローバルなパートナーシップの推進 Develop a global partnership for development</p> <p>ターゲット 8-A 開放的で、ルールに基づく、予測可能でかつ差別的でない貿易と金融システムを構築する</p> <p>ターゲット 8-B 後発開発途上国(LDCs)の特別なニーズに取り組む</p> <p>ターゲット 8-C 内陸開発途上国と小島嶼開発途上国(太平洋・西インド諸島・インド洋などにある、領土が狭く、低地の島国)の特別なニーズに取り組む</p> <p>ターゲット 8-D 国内および国際的措置を通じて途上国の債務問題に包括的に取り組み、債務を長期的に持続可能なものとする</p> <p>ターゲット 8-E 製薬会社と協力して、途上国で人々が安価で必要不可欠な医薬品を入手できるようにする</p> <p>ターゲット 8-F 民間セクターと協力して、特に情報・通信での新技術による利益が得られるようにする</p>
 <p>乳幼児死亡率の削減 Reduce child mortality</p> <p>ターゲット 4-A 2015年までに5歳未満児の死亡率を1990年の水準の3分の1にまで引き下げる</p>	
 <p>妊産婦の健康状態の改善 Improve maternal health</p> <p>ターゲット 5-A 2015年までに妊産婦の死亡率を1990年の水準の4分の1に引き下げる</p> <p>ターゲット 5-B 2015年までにリプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)の完全普及を達成する</p>	

ミレニアム開発目標(MDGs)の進捗状況

「ミレニアム開発目標」の達成期限の **2015 年まで、あとわずか**となりました。進捗状況はどうなっているでしょうか？ また、達成のカギはどこにあるのでしょうか？ 先頃発表された報告書『**The Millennium Development Goals Report 2012**』を概観してみましょう。

■これまでの成果

極度の貧困が世界各地で減少

(速報値によると) 貧困削減のターゲット(1-A)を達成

安全な飲料水を利用できない人々の割合を半減させるというターゲット(7-C)を達成

2億人のスラム居住者の生活が改善(スラムに関するターゲット(7-D)の2倍！)

初等教育における男女間の平等を達成

多くの国々で、すべての子供が初等教育を受けられるように

5歳未満児の死亡率が急速に減少

多くの HIV 患者が治療を受けられるように(ただし、いまだターゲット(6-B)には到達せず)

結核について、まん延の半減、発生の減少、ともに軌道に乗る

マラリアによる死亡が減少

■課題 ～“不均衡(Inequality)”が上記の成果を損ね、カギとなる地域で進展を遅らせています～

立場の弱い労働者は20年でわずかに減っただけ

発展途上地域においては、2011年時点で、全労働者のうち58%が立場の弱い労働者(無給の家事労働者と自営業者)と推測されます。その割合は20年で9%しか減っていません。とりわけ女性と若者がこうした不安定で、報酬が不十分な立場にいます。

↗

ないと考えられます。さらに、発展途上地域の約半数(25億人)がいまだに改善された下水設備を利用できていません。下水設備の普及率は全世界で2015年までに67%に達するペースですが、これでは目標達成に必要な75%には届きません。

妊産婦の死亡率の削減、ターゲット(5-A)の達成には程遠い

妊産婦の健康に関しては改善が見られるものの、その進展は依然として遅いです。未成年の出産は減少し、避妊具も普及してきましたが、それらの2000年以降10年間のペースは、1990年～1999年の10年間のペースと比べると落ちています。

飢餓は世界規模での課題

栄養不良に関するFAOの最新の調査によると、2006年～2008年時点で、8億5000万人(世界の全人口の15.5%)が飢えています。所得面での貧しさは改善されているものの、いくつかの地域で飢餓に関する進展がないことを受け、こうした高い水準が続いています。子供の栄養不足を減らすという面でも進展は遅く、2010年時点で南アジアの子供のうち1/3が低体重です。

安全な水源の利用率は農村部では低いまま

2010年時点で、改善されていない水源を利用している人々の割合は都市部では4%に過ぎませんが、農村部では19%に上ります。そして、ターゲットへの進捗状況を計る指標においては、安全性や信頼性、持続性といった側面が反映されていないため、本当に安全な給水を利用できている人口は統計の数値よりも少

↗

増え続けるスラム居住者

都市人口のうち、スラムに住む人々の割合は減っているものの、絶対数では1990年の6億5000万人から増え続け、現在8億6300万人がスラム状態の地区で生活しています。

■2015年へ、さらにその先へ ～ジェンダー平等と女性の地位向上がカギ！～

ジェンダーの不平等はいまだに存在しています。女性は教育や仕事、経済的な財産を得るのにあたり、そして政治に参加するのにあたり、差別を受けています。そして、女性への暴力こそが、あらゆる目標を達成するための努力を台無しにしているのです。2015年へ、さらにその先へと進んでいけるかどうかは、こうした関連する課題の解決にかかっています。

世界の貧困, 開発について ~長南史男先生~



長南史男先生

農学研究院・特任教授

(開発経済学)

■私の研究と貧困問題

「貧困」と聞くと、都市(スラム)の問題と考えがちですが、スラムを形成する貧困層は農村からやってきます。「貧困」を農村の段階で食い止められないかと考えるのが、私の研究している「開発経済学」です。

私は長年ネパールのカトマンズ近郊の農村を調査してきました。先進国が食糧や肥料、資材、技術を提供してきましたが、なかなか食糧自給率が上がらない。むしろ生産力が落ちてしまった。なぜでしょうか？

どうも農民のモチベーションが低いんですね。たとえば、日本のODAで灌漑設備を作っても、みんなでメンテナンスしようという意識が低くて壊れたままになっている。ちょっと我々の感覚とは違うなあと思わわけです。どうしてモチベーションが低いのかを考えると、1つには民族が非常に多いんですね。言葉も宗教もしきたりも違う人々が団結して、たとえば灌漑設備をみんなで守ろうというのはなかなか難しい。もう1つは「市場経済」が未発達なことです。

「市場経済」と聞くと、農村の暮らしを破壊するものというイメージがあるかもしれません。しかし、貧困解決に「市場経済」が果たす役割は大きいのです。たとえば、野菜等の商品作物を作り、市場で売って、現金を得る。こうした経験は農民のやる気を引き起こします。もっと生産性を高めようと思わせるわけですね。そういう意味では、市場へ売りに行くための道路や橋等のインフラの整備は大事です。

市場経済の不完全性を補った例として、グラミン銀行が挙げられます。女性にターゲットを絞り、無担保・少額融資を行

い、貧困解決に成果を収めました。しかし、いつまでもグラミン銀行に借りているわけにはいきません。

途上国の人々が自分たちで回せる経済を構築する理論モデルが、いま求められています。

■おすすめの本

『「飢餓」と「飽食」』

荏開津 典生 著

講談社(講談社選書メチエ ; 20) 1994年

農業経済学の立場から書かれた本で、よくまとまっています。食糧問題の本質を分配の問題と指摘し、「利用権」の概念を最初に紹介した本です。

»北大ではどこにある？

本館・開架・文庫(3階)

・請求記号:080/20/20

・資料番号:0190515211

北図書館・2階・文庫新書コーナー

・請求記号:080/20

・資料番号:0172228990

ほか

詳しい所蔵情報や現在の貸出状況はこちらでチェック！



■北大生のみなさんへ

途上国の現場で重要なのはローテクです。高度な技術で立派な設備を作っても、現地の技術力ではメンテナンスができません。基本を押さえて、地元の技術力に応じてモノを作る必要があります。

最近の学生と接していると、みなさん、明るくて、積極的な印象を受けます。気軽なノリで、大学で培った「サイエンス」を携えて世界に飛び出してほしいですね。やること、やれることはたくさんありますよ！

世界の貧困, 開発について ~佐野大輔先生~



佐野大輔先生

工学研究院・准教授

(水質変換工学)

■私の研究と貧困問題

私は水処理工学, 微生物学が専門で, 水中の病原微生物の中でも「ノロウイルス」や「ロタウイルス」を主な研究対象としています。これらは特に重要な「胃腸炎ウイルス」となっており, 人から人へ感染しますが, 水を介しても感染します。

ロタウイルスに感染すると下痢による脱水症状をとまいません。先進国では, 感染してもきれいな水を補給することによって治るため, 亡くなるケースはほぼ皆無です。一方, 途上国では, きれいな水がない, 医療施設も少ない, といったことが原因で, 乳幼児を中心に毎年数十万人が亡くなっています。

さらに, WHO(世界保健機関)による2004年の「Global Burden of Disease(世界疾病負担)」の調査では, 「Unsafe water, sanitation, hygiene(安全な上下水道と衛生設備を利用できないこと)」は死亡者数から見た危険因子としては11番目ですが, 死亡だけではなく病気により健康を損なった期間も合わせて数値化した「DALY(ダリー)」という指標で見ると4番目に上がってきます。つまり, 病人を増やして社会の活力が低下する側面も無視できない程大きい, ということです。

胃腸炎ウイルス関連に対して投入されている予算や人員は, AIDSやマラリアなどの感染症対策に比べると, それほど潤沢ではありません。しかし, 水処理を含むインフラへの一定の投資によって, 1人2人だけではなく村などのコミュニティ全体といった規模で状況を改善できる可能性があります。

私たちとしては, このような水系感染症の問題に対して, ウイルスの性質を細かく調べて制御し, 衛生的な環境を創り出すことによって発生を抑えることを追究しています。途上

国に合った方法で水の設備を整えていくことができれば, 貧困をもたらしている病気は相当抑えられるでしょう。そうした面から貢献したいと考えています。

■おすすめの本

『傲慢な援助』

ウィリアム・イースタリー 著

東洋経済新報社 2009年

「今, 世界には二種類の貧困の悲劇がある。第一の悲劇は, 貧困が何十億もの人々を苦しめているということ。第二の悲劇は, 莫大な援助資金が投入されているのに貧困が解決されていないということ。」

元世界銀行職員の著者が, 従来の途上国援助の手法を批判し, まず第二の悲劇を終わらせるため, 本当に必要とされる援助のやり方について論じている本です。

» 北大ではどこにある?

本館・開架閲覧室(4階)

・請求記号: 338.91/EAS

・資料番号: 0780094098

北図書館・2階&3階・一般図書

・請求記号: 338.91/EAS

・資料番号: 0280482964

ほか

詳しい所蔵情報や
現在の貸出状況は
こちらでチェック!



■北大生のみなさんへ

このイベントを機会に, 何かを始めたり, 勉強したりしてほしいと思います。その際には, 「本当に求められていることは何か」という視点を持つことが大切です。

海外にもどんどん飛び出してほしいです。勉強したり知識を身につけたりすることは, 日本でも十分できます。それよりも, 海外の人と意見を交換し, 自分の意思を伝える, といった経験をぜひ積んでください。

佐野先生には, イベント当日にミニ講演を行っていただきます。みなさん, ぜひお集まりください!

世界の貧困, 開発について ~正木幹生先生~



正木幹生先生

国際本部
シニアコーディネーター/講師

■私の仕事と国際協力

現在、国際本部で学生海外派遣プログラムの企画を担当しています。以前は国連地域開発センター(UNCRD)やJICA(国際協力機構)で国際協力に携わってきました。

国際協力に取り組むきっかけとなったのは、高校生の頃に見た青年海外協力隊のポスターです。とてもカッコよくて、いつか自分も！と憧れました。

学部生時代は国家や政府の視点で国際協力を勉強しましたが、大学院生時代はタイのユーカリ植林の問題を研究テーマにして、現地の人々にユーカリ植林をどう考えているかを直接聞き取りました。その後、国連で研究員として、タイの植林の観点から貧困解決に取り組みました。データ収集や調査だけでなく、それらに基づいてタイ政府に提言を行うという点が大学院生時代と大きく違うところでしたね。

国連では財政上、提言に止まりましたが、JICAに移ると、実際にタイ政府へ機材を提供したり、職員向けの研修を開いたりといった活動をしました。困っている人々への直接的な支援ではなく、政府の職員を育成することで間接的に困っている人々を支援するというアプローチですね。政府の職員に変わってもらわないことには、持続的な開発や支援はなかなか難しいものです。

その後、ラオスとガーナの貧困問題にも携わりました。このときは、日本政府の援助の枠組みを企画しました。援助の効果を上げるために、他の援助国と分野が重複しないように調整したり、或いは連携したりですね。

こうして国連やJICAで“途上国における人材育成”を手掛

けてきましたが、このあたりで自分の立ち位置を変えてみようと思い、現職に転じました。“途上国における人材育成を手掛ける人材”をぜひ北大で育成したいと思っています。

■おすすめの本

『ラオスの開発と国際協力』

西澤 信善, 古川 久継, 木内 行雄 編
めこん 2003年

私は5年間ラオスの開発に取り組んできましたが、この本を読めば、10年前の当時、開発の現場に携わった方々がラオスをどう見ていたかがわかります。アジア最貧国のひとつ、ラオスに関心を持ってもらえれば嬉しいです。

»北大ではどこにある？

本館・書庫・和書

・請求記号:337.594/NIS

・資料番号:0180013143

・請求記号:337.594/LAO

・資料番号:1291027716

ほか

詳しい所蔵情報や現在の貸出状況はこちらでチェック！



■北大生のみなさんへ

世界の貧困解決のために、実際に現場を体験・体感してほしいですね。それと書物による勉強も大事です。これらふたつはどちらかが欠けてもいけません、順番はどちらが先でもいいと思います。勉強してから出掛けてもいいし、帰ってから体験を掘り下げて考えるのもよいと思います。海外へはばたくきっかけとして、北大には「ファースト・ステップ・プログラム(FSP)」があります。興味のある方はぜひ国際本部(北図書館の南の建物)を訪ねてみてください！

世界の貧困, 開発について ~宮内泰介先生~



宮内泰介先生

文学研究科・教授

(環境社会学)

■私の研究と開発協力

20年以上、太平洋のソロモン諸島のアノケロ村でフィールドワークを行っています。この村では、いわゆる「貧困問題」として、熱帯林の伐採や、カカオやココヤシ等のアンフェアな取引が注目されがちですが、村の住民を環境問題や格差問題の単なる「被害者」と図式化してしまうと、実態を見誤ってしまいます。

私の立場は、一番大事なものとして、住民の生活を中心に据え、社会的な資源(*住民が生活を続けていくために利用しているさまざまなモノやコト。物質的な資源だけでなく、技術、制度、人間関係等も含む)を周囲に配して、彼らがそれら資源をどのように使って生活を組み立てているかをつぶさに見ていこうというものです。その際、相互扶助のしくみや人間関係といった、なかなか外から見えてこない社会的な資源まで目を配らないといけません。

たとえば、相互扶助のしくみに重きを置いて生活している人々に対し、闇雲に経済活動に偏った開発協力を行うことは、支援としての外れなだけでなく、最終的に彼らの生活自体をおかしくしてしまいます。

開発協力にあたっては、彼らが自律的に、幸せに生活を組み立てられるようにすることが重要です。つまり、1. 住民に一定程度の選択肢があり、2. 住民本人が選択の主体であり、3. 家族や友人を中心としたいい人間関係の中で、4. アイデンティティや尊厳が保たれた状態で、生活を組み立てられるように支援することです。経済のみ、環境のみ、ではなく、生活を組み立てる力全体を支援(エンパワメント)す

ることが大切です。アノケロ村では教会関係者が識字教育を行っています。これは目立たないけれど、大事なエンパワメントだと思いますね。

地域にとって何が大事かは、外の人に言われるまでもなく、その地域の人々が一番わかっているはずですが、それを発見できなかったり、外部へ伝える手段を持っていないことがあります。フィールドワークを行う研究者の役割は、地域の人々と一緒になって、大事なものを発見し、外へアピールするところにあると思います。

■おすすめの本

『ナマコの眼』

鶴見 良行 著

筑摩書房 1990年

「世界の辺境」だとか「途上国」や「田舎」と呼ばれる地域の面白いダイナミズムが見られます。

»北大ではどこにある？

本館・書庫・和書

・請求記号:390/TSU

・資料番号:0171033582

北図書館・2階&3階・一般図書

・請求記号:390/TSU

・資料番号:0280167483

ほか

詳しい所蔵情報や現在の貸出状況はこちらでチェック！



■北大生のみなさんへ

ぜひ現場へ出掛けて、そこで想像力を働かせてほしいですね。いろんなことが見えてくるはずです。また、現場で得たものは必ず大学での勉強と結び付くはずですので、ただ現場に行くだけでなく、大学での勉強も頑張ってください。

世界の貧困, 開発について ~青山和佳先生~



青山和佳先生

メディア・コミュニケーション
 研究院・准教授
 (文化人類学・地域研究)

■私の研究と貧困問題

貧困問題に最初に関心をもったのは、大学生の頃です。インドネシアを訪れる機会があり、現地できた友人に日本にも来てほしいと誘ったところ、「お金がないから行けない」と言われ、この機会の不公平さについて調べたいと思ったことがきっかけでした。

大学院生の時には、労働省の特殊法人のアルバイトとしてフィリピンの地方都市における雇用状況などを調べるためにセブやダバオに派遣される機会がありました。後に指導教官から現地の NGO を紹介されたこともあり、博士課程 3 年の時に留学してダバオに調査に入りました。

ダバオ市の雇用統計を見ると、失業しているか、労働時間が足りない・賃金が低いといった不完全就業の人が多かったです。中でも最も貧しいと言われていたのは、エスニック・マイノリティである「サマ」、地元では「バジャウ」と呼ばれる人たちでした。このサマを対象に、経済的な意味での貧困が人々の生活にどのように関わっているのかという問題について、3 年半現地に滞在してフィールドワークを行い、博士論文を書きました。これを原型に、その後大量のデータ整理と分析、追加調査を行った結果をまとめた本が、『貧困の民族誌：フィリピン・ダバオ市のサマの生活』です。

貧困の実態を表現するのは難しいです。私は生活を書きたいのですが、経済学では直接そこに焦点を当てられない。社会学や人類学ではお金の話を扱いにくい。貧困研究は、各学問分野のどの枠組みにもはまりにくい学際的なもので、個人で全て行うのは難しいので、共同研究も良いですね。

現在取り組んでいる研究の柱は、2 つあります。1 つは、『貧困の民族誌』で書いたことを英語及び現地語に直すこと。調査地には書かれた歴史というものが少ないので、集めた

データを現地にいったんお返して、住民と一緒に物語を作ることができればと考えています。気をつけていることは、「貧困」という概念の下に人々の生活を単純化してしまわないことです。

もう 1 つは、同じフィリピンでも、地域のエリート(医師・弁護士などのプロフェッショナル)と呼ばれるような人たちで、フィリピン社会を良くしようと活動している人たちにも関心が向いており、保健協同組合の運動を長年行っている医師の研究などを行っています。

■おすすめの本

『戦後日本における貧困層の創出過程』

籠山 京 著

東京大学出版会 1976 年

貧困問題については、日本にも、素晴らしい研究の蓄積があります。

この本は、かつて日本が発展途上にあり貧困を大きな問題として抱えていた時期、北海道和寒町を対象として、農村世帯の実態を 20 年以上に渡り追跡調査した結果を報告しています。貧困を、イメージではなく、時代の制約の中における 1 人 1 人の生き方から捉えようとしている本です。

>>北大ではどこにある？

本館・開架閲覧室(4 階)

・請求記号: 339.46/KAG

・資料番号: 0111548910

本館・書庫・和書

・請求記号: 301.2/KAG

・資料番号: 0710416682

ほか

詳しい所蔵情報や現在の貸出状況はこちらでチェック！



■北大生のみなさんへ

立ち上がっただけで終わらずに、アクションを起こしてほしいと思います。

アクションにも色々ありますが、せっかく大学にいるので、本を読んでください。自分が読みたい内容のものだけではなく、好きじゃない、受け入れ難い、信じ難い、反発したくなるような内容のもの含めて、じっくり深く読んでみてください。

みなさんの参加をお待ちしています！

パネル展示「Introduction to STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」は如何でしたか？

最後に、イベント概要、FAQ、新田館長と山下国連広報センター所長のメッセージをご紹介します。

■イベント概要

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

日時： 2012年10月17日(水)=貧困撲滅のための国際デー
開場 18:00 開演 18:30(イベントは1時間ほどを予定)
会場： 北海道大学附属図書館 本館 メディアコート



プログラム：

1. 国連資料の利用ガイダンス(18:30-18:40 頃)
図書館職員が国連資料の利用方法をご説明します
2. ミニ講演(18:40-19:00 頃)
工学研究院・佐野大輔准教授
「世界の貧困問題解決のために、あなたは何をイメージしますか」
3. 国際協力活動の事例報告(19:00-19:20 頃)
農学部4年・小林隆英さん
「孤軍奮闘！ フィリピン カミギン島におけるインターン」
国際協力学生団体「結～yui」
「なにができるか、なにをするのか」
4. スタンド・アップ！(19:20-19:25 頃)
階段に並んで、参加者全員で写真撮影！

■FAQ

・ひとりでも参加できますか？

参加できます。「スタンド・アップ」は1名ではできない(立ち上がったことを証明するひとが必要)ので、この機会をご利用ください。

・貧困問題に疎いのですが、参加できますか？

参加できます。このイベントをきっかけに貧困問題について考えていただければ、嬉しいです。

・北大生ではありませんが、参加できますか？

参加できます。学外の方向けに、当日開場前に正面玄関ホール(ここ)にて、ごく簡単な受付を行う予定です。

・用事があって、この日時だと参加できなさそうです……

申し訳ありませんが、この日時のみで開催となります。なお、遅



れても入場は可能です(発表者に配慮のうえ入場ください)。

・何かお手伝いしたいのですが……

友達、同僚への声掛けをぜひお願いします。イベント当日、大勢で立ち上がりましょう！

・他に質問したいことがあります！

平日の9～17時に職員にお尋ねください。また、チラシ、ポスターに記載のお問い合わせ先でもお受けしています。

■メッセージ

新田孝彦先生(北海道大学附属図書館/国連寄託図書館 館長)

貧困問題は、環境問題と並んで、持続可能な世界を実現するための全人類的な最重要課題であり、解決のためには、学問の枠組みを超えた知の集積と強い意思が必要です。北大生の皆さんには、ぜひこの問題に関心をもっていただきたいと思います。その最初の一步として、一緒に立ち上がりましょう。

認識から行動へという次のステップのためには、図書館にある関連書籍が役に立ちます。こちらもどうぞご利用下さい。



山下真理さん(国連広報センター 所長)

北海道大学の皆さん、国連の大切なキャンペーン STAND UP TAKE ACTION！に参加していただき、ありがとうございます。世界の貧困をなく

すための8つのミレニアム開発目標(MDGs)を達成するまで残り2年となりました。今年、国連広報センターでは、特に世界の女子の置かれている状況を改善するということで、世界のGirlsに注目します。クラーク博士が残した言葉を21世紀の言葉で言い換えるなら“Boys and Girls, be ambitious!”となるでしょう。国際連盟時代に7年も事務次長という大役を果たした新渡戸稲造氏を生んだ北海道大学は、歴史的にも世界と繋がっています。国連は、北海道大学の皆さんと共にスタンド・アップします！



それでは、10/17(水)にお会いしましょう！